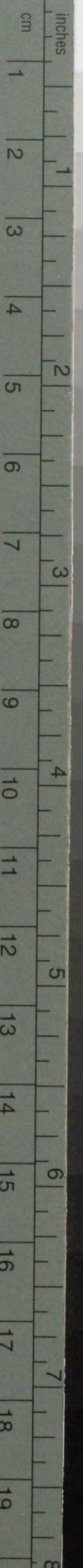


Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak



法 事 讚

玉 置 鞆 晃

法  
事  
讚

玉  
置  
韜  
晃

目次

一、序 説	三
二、註 釋 書	六
三、流 傳	八
四、題 號	一〇
五、阿彌陀經と今讀	一三
六、讀 誦 經 典	一四
七、一 部 組 織	一六
八、三 往 生	二二

一、序 説

今讀は善導大師の著五部九卷中の隨一であつて、上下二卷より成り、往生淨土の行を修する法事供養の規定を明されたものである。よつて、今讀一部を通して、この規定に關しては、諸經の通説を採用されたやうであつて、かの唐朝以前の古師の先例を尊重して、これに則つたものが多いやうである。下卷に於ては、特に阿彌陀經を中心とした行持を組織されてゐるが、もとより往生淨土の行持を組織すること以外に他意あつてのことではないのだから、此の一段についてもあながちに一宗の安心にあてはめてとやかう論斷することは、却てその立場を亂すものだと思はれる。

先づ、製作の來意といつたやうなことに對しては、或は既に五部九卷の來意の條下について述べられたことゝ信するが、こゝでも一應その問題に觸れねばならぬ。先哲の間にも詳細この點について論じつくされてゐるが、四帖の疏は教門を釋し、具疏は行門を明かしたものだらう。いふまでもなく、四帖の疏は、觀經の正意を開顯し、古今楷定をその目的としたものだから、すべて教門に屬するものである。これに對して具疏は大師の自行を明かしたものであり、或る特定の經論の註釋書ではなく、佛前勤行の行儀について一般的な組織解説であるのだから、

ら、正しく行門に属すべきであらう。

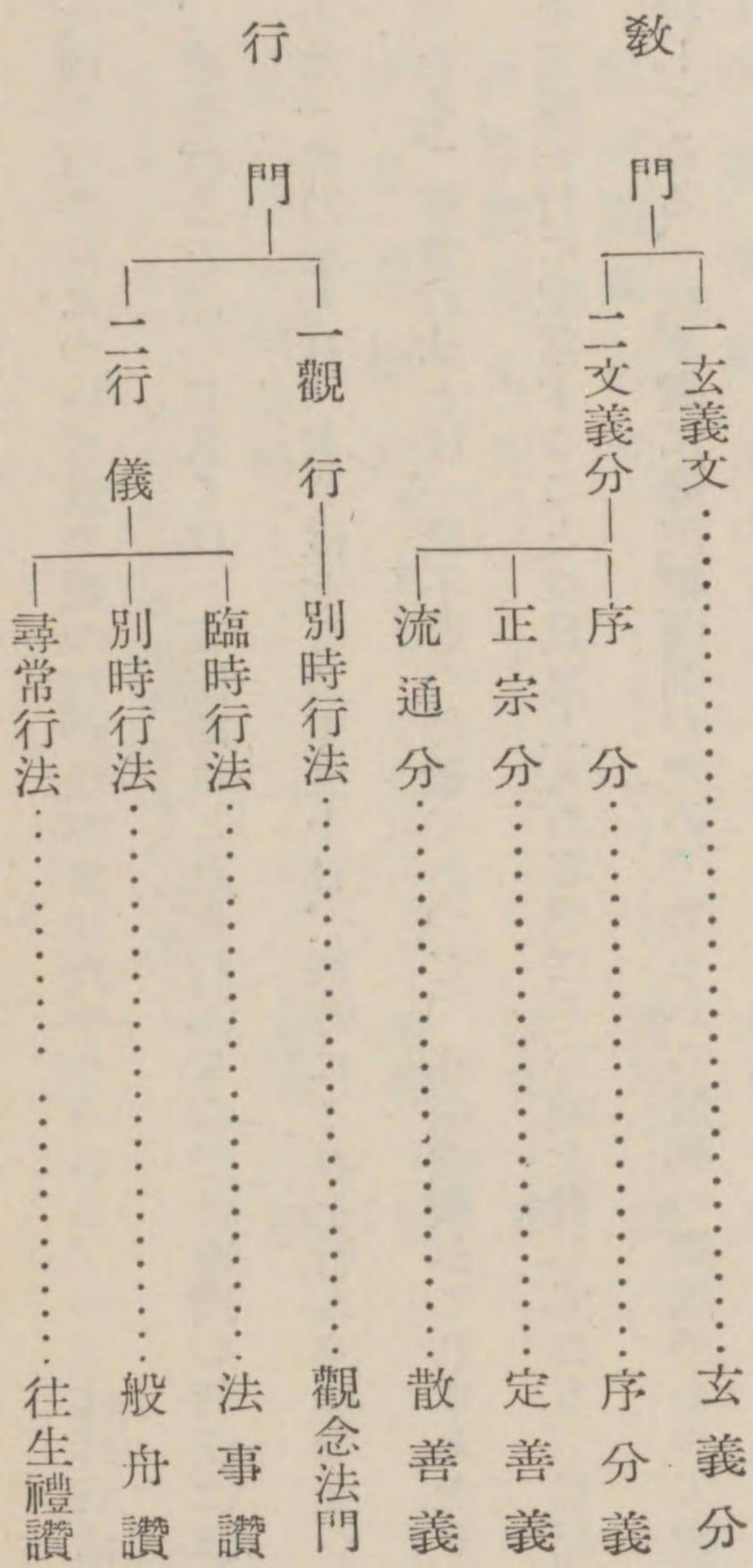
大師の教行二門の立場について考慮すべき點は次のやうである。即ち教門は經説の忠實な註釋であるために、全然經説に準じて廣く諸機を攝する點から正雜二行を分判して往生の行を定められた、かの『散善義』の「就行立信」の釋がその適例である。だが、行門は經説にとらはれず純然たる自行であるから、たゞ、正行のみを自行化他してゐるやうである。かの『往生禮讚』にも、專雜の得失を判じて雜行を廢してひたすら正行をすゝめてゐる。この點は疏と具疏との立場を明示してゐるのであらう。

さてまた、具疏のうちを更に教行門に配當してみると、『觀念法門』は觀佛三昧、念佛三昧を教へたものであるから行門に属すべきはいふまでもないが、具疏のうちで更に判屬すれば教門に判すべきである。これに對して、餘の三部は純然たる自行門である。そのためか、觀念法門には讚の一字を置いてないが、他の三部はみな讚の字をつけ加へてゐる。就中、『往生禮讚』は常途の勤行の作法を明したものであるから六時禮讚と名けられてゐる。『般舟讚』は臨時の行法を明したものであつて、般舟三昧經の所説を中心とした別時念佛の行法解説である。今讚もまた、臨時の行法を示されたものである。

南山道宣の『行事鈔』によると佛事と法事と僧事との區別を述べて、佛事とは佛像を彫刻し修理して佛に供養する行事であり、法事とは經卷を書寫し、讀誦し、行道散華などの行事であり、僧事とは布薩、羯磨、懺悔などの作法である。この道宣の説に従ふと、今讚の法事讚といふ題號が直ちに一部の内容を示すものとして意味をもつこととなるやうである。

更に、今讚の造由を重ねて窺ふと、願往生法事讚と題號にもあるやうに、願生淨土を自他に勸勵しようがためであり、而も施主道場の恩を報ぜんがための行持であつた。元來、施主の恩を念報することが懺法の規定であつたやうである。『慈悲道場懺法』(十卷)を見ても、第八に五種の恩を説示してゐるが、その第二が施主の恩である。また『釋氏要覽』に於ても四種の恩を示してゐるが、その第四は施主の恩である。更に『五會法事讚』にもこの點について詳しく説き明してゐる。

善導大師著五部九卷を教行二門に配當すると、



善導大師の行時法については三種の行時法があつたやうである。一は臨時行法、二は別時行法、三は尋常法であつて、臨時行法とは一日若くは一夜臨時にこれを行ふもので法事讚の行法は即ちこれにあたるものである。別時行法とは一日乃至七日、若くは七日乃至九十日、別時にこれを行ふものであつて、觀念法門又は般舟讚の行法はそれである。尋常行法とは一期不退いちごふたの行儀であつて、往生禮讚がこれにあたるものである。

本疏を五種正行に配當することは良忠上人の私記にその端を發してゐる。私記では具疏四部の前後もこの問題から解決してゐる、法事讚は彌陀經讀誦のためであるから最初の撰述であつて讀誦正行にあたり、觀念法門は觀察正行に配し、禮讚は禮拜の規定を示したものだから禮拜正行に當り、般舟讚は讚嘆供養を明したものであつて最後の撰述であると判じてゐる。だが、私記の配當は一應のものであつて、必ずしも定説ではなく善導大師の本意でもないやうである。大體は禮讚、般舟讚、法事讚は讚嘆供養正行に屬すべきであらう。

二、註 釋 書

今讚の註解撰述について、

法 事 讚 私 記……………三……………良忠…撰

法事讚私記冠註……………一……………未詳	法事讚私記見聞……………三……………聖聰……………撰
法事讚私記私鈔……………三……………加祐……………撰	觀 門 要 義 鈔……………一……………證空……………撰
法 事 讚 秘 鈔……………二……………行觀……………撰	法 事 讚 鈔……………二……………堯惠……………撰
法事讚積學要義鈔……………二……………實信……………撰	法 事 讚 甄 解……………七……………僧樸……………撰
法 事 讚 叢 林 記……………一……………慧空……………撰	法事讚刊定記……………三……………慧雲……………撰
法 事 讚 聽 記……………三……………僧鎔……………撰	淨土法事讚講錄……………一……………惠覺……………撰

以上は現存のものゝ中でことに重要なものである。

### 三、今讚の流傳

八

今讚の流傳については古來異論にわたつてゐる。存覺上人の『真宗血脈傳來鈔』によると『往生禮讚』は最初に傳はつたものである。即ち桓武帝の延暦二十四年十二月二十五日傳教大師の將來にかゝるものであつて、これが唐の順宗の永貞元年にあつてゐる。『觀念法門』と『般舟讚』とは、仁明帝の承和六年十二月十九日、圓行法師の將來にかゝつたものであつて、それが、唐の文帝開成四年にあたり、『今讚』は仁明帝の承和十四年に慈覺大師によつて將來せられたもので、それが、唐の宣宗の大中元年にあたり、『四帖疏』は文德帝の天安二年、智證大師の將來にかゝるものであつて、これが唐の宣宗の大中十二年にあつてゐる。

西山の『密要決』には四帖の疏は天長年中に智證の將來にかゝつたものだといつてゐるが、智證の歸朝は天安二年であることは諸記録の通説であるから、或は天長は天安の誤記であらう。また智證將來目錄には僅かに『六時禮懺文』一卷と『六時懺釋文』一卷とであるから、この説は直ちに信じられない。

了譽の『傳通記糅鈔』には五部の疏はみな智證の將來にかゝつたものだといつてゐる。また智證將來目錄には僅かに『六時禮懺文』一卷と『六時懺釋文』一卷とであるから、この説は直ちに信じられない。

智圓の『禮讚鈔』には、禮讚は聖武帝の天平七年（せんぽう）玄昉（げんぼう）僧正によつて『集諸經禮懺儀』として傳へられたものだといつてゐる。

善導大師の滅後凡そ四十餘年を経て、唐玄宗開元年中崇福寺釋智昇が『集諸經禮懺儀』二巻を集録してゐる。その上巻には通じて諸佛を禮讚し、下巻では特に彌陀禮讚の儀規を示してゐるが、全く善導大師の往生禮讚をそのまま引用してゐる。だから、上巻の撰號には「大唐西崇寺沙門智昇撰」と記録してゐるが、下巻には智昇の撰號と並べて「比丘善導集記」として大師の名を出してゐる。ところが開元十八年に至つて智昇が『開元釋教目錄』二十巻を撰して、この『集諸經禮懺儀』を大藏經中に編入したのである。それからまた、西明寺圓照が徳宗の貞元十年『大唐貞元特定釋教目錄』三十巻を撰して、またこれを大藏經中に編入した。

『續日本紀』第十六によると、聖武帝の天平七年入唐僧玄昉が二十年にして歸朝し、五千餘巻の經論を將來したやうである。『開元釋教目錄』の編輯の唐開元十八年は天平七年より五年前である。だから、玄昉の將來した大藏經は開元錄による五千四十八巻であつたらう。よつてそのうちに輯入されてゐた『集諸經禮懺儀』が正しく傳來されたとせねばならぬ。ところが、『大日本古書』第八の正倉院（しやうそうゐん）文書寫經所解の天平十四年九月の條下に『往生禮讚』一卷二十九帙とあるから『集諸經禮懺儀』の中から下巻の往生禮讚だけ別出したものか、或はその他の著述とともに別行本として傳來したものであらう。その後天平年間に四帖疏や具疏などを筆寫したことが記録されてゐるから、或は既に天平年間に傳來されてゐたのではなからうか。

『黒谷傳』第十蓮華王院即ち今の三十三間堂は後白川院の御建立にかゝつたもので、後白川院の十三回忌法要の節、源空上人に勅定があつて、その大導師をつとめられたことがあつたやうだが、その勤行の差定はすべて法事讚に示されたとほりであつたと傳へられてゐる。その後、善觀、聖光など今讚の行儀を修したらしい。西山派でも、嵯峨二尊院に於て毎年一日二夜にわたり今讚の行儀を修したと傳へられてゐる。

また存覺上人の『二期記』中にも法事讚に則り勤行したことを傳へてゐる。『敬重繪詞』六にも覺如上人の御父覺慧法師の十三回忌を大谷に於て法事讚の行法をもつて御いとなみになつたと傳へられてゐる。蓮如上人以前は、朝夕には六時禮讚を誦誦して、別時の法事には法事讚を用ひられたやうである。

#### 四、題 號

今讚の題號に三種ある。一は轉經、行道、願往生、法事讚であつて、今讚の首題がそれである。二は西方淨土、法事讚であつて、上卷の尾題がそれである。三は安樂、行道、轉經、願生淨土、法事讚であつて、下卷の首尾の題がそれである。良忠上人の『私記』には、各具缺があるが、影略互顯の意であると説き、僧樸師の『疏解』には、たゞこれ具略の異のみで、具にいへば轉經安樂行道願生西方淨土法事讚といふべきだと示してゐる。かやうに一部の書に二

三の別目あることはその例がかなりある。近く往生禮讚にも、往生禮讚偈とか願往生禮讚偈とか、觀一切衆生願生西方極樂世界阿彌陀佛國六時禮讚偈とかいはれてゐる。

そこで、今讚の首題を解説すると、これを五節として見ると便利である。即ち轉經と行道と願往生と法事と讚と節分してみよう。

轉經とは阿彌陀を轉ずることであるが、その轉には轉詠と轉説と轉讀との三義がある。轉詠とは節をつけて讀むことであり、轉説とは經意を説きあかすことであつて、轉法輪と同意義である。轉讀とは單に經を讀むことである。ところで今の轉經は正しく轉詠の義であつて、經文を誦誦し讚嘆する行儀である。

次に行道とは佛邊を旋繞する意味である。三市或は七市することが今讚一部の行法の中に出てゐる。西域記によると行道は西域の風習として、歸敬の至極であると傳へてゐる。『釋氏要覽』には繞佛旋行といふことだと示してゐる。

次に願往生とは作願門であつて、轉經行道は諸經論の通儀であるが、今讚の轉經行道はひとへに願生淨土のためであつて、全く通儀と特異な深い意味をあらはさうとしたものである。

次に法事とは、淨土の教法と道場の事業といふことであつて、眞實の教法によつて勝れた行業を修することを示したものである。

次に讚は讚嘆の意である。また、讚詠といふ意味もある。

具略三名については、今讚の主質は轉經にあつて、行道も散華も供養もすべて轉經がための前加行である。そこで、上卷は總題であつて、下卷は別題を標したものである。上卷は行道を明かす作業の次第に約して別題を安じ、行道が畢つて後の下卷の轉經であるところから行道轉經といつたものであらう。

## 五、阿彌陀經と今讚

今讚は阿彌陀經の轉讀を主質とした行法であるが、三經の中で特に阿彌陀經を今讚の行法に選んだかといふことについては大師の明白な意見を見出すことができぬ。だが、大師の生涯を記録した資料によつて見ると、大師は生涯、この小經を行法の中心とせられたやうである。かの指定の疏の撰述に當つても、日々、阿彌陀經を誦すること三徧、また、疏の脱稿に際しても、日別に阿彌陀經を誦すること十徧といはれてゐる。更に、他に勧めて、或は願じて阿彌陀經を誦すること十萬徧を滿せよ、日別に十五徧なれば、二年に一萬を得、日別に三十徧なれば一年に一萬なり、或は誦すること四十五百徧已上の者、願じて十萬徧を滿せよ。といつて、しきりにこの經の持誦を勧められてゐる。またの傳記によれば、大師は常に信施をもつてこの經の書

寫にいそしまれて、その書寫實に數萬卷に及んだといはれ、現に先年、その願經が新疆地方から發見されたやうである。

かやうに、大師が阿彌陀經を尊崇せられた所以を窺つて見ると、この經は、その分量からいつてきはめて短篇であり、小經とも小本とも四帋經ともいはれてゐる。『大唐内典錄』では、羅什の譯本は五帋、乞那跋陀羅の譯本は四帋、玄奘の譯本は十帋と傳へてゐる。かやうに、淨土三經中でいちばんに小部なものであるから、實際の行事としては、この上もなく便利であることが大きな役割をもつてゐるのであらう。また、小部とはいへ、その内容は、簡にして要を得たものであることもまた重要視された所以でもあらう。

大體、小經の組織は、先づ、極樂の方處を出し、次に、依正二報の名義を辯じ、次で、往生人の得益を説き、次に、その行因を述べて一日七日の執持名號を出し、次で、六方諸佛の證誠を擧げ、最後に發願願生が勧められるから、この巧みな組織内容が、私どもの欣求の信を勧發する上に非常に都合がよいといふことが、大師の念願にそうしたものだらう。

更にまた、その内容を靜かに讀むと、全體を通じて、よく三佛の大悲が盛られてゐて、ことに、無問自説の點に於て一代諸經の結經とさへ味はれる。

事實、阿彌陀經は、形式内容ともに行持實踐の上から見て、三經の中、特に勝れたものだから、今讚はひとへ



にこの經を典據としたものであらう。

## 六、讀誦經典

今讀が、その形式内容からいつて、行持の實際に適切である阿彌陀經を選んだといふことについて私の平生の所感を述べたいと思ふ。

昔から、讀誦經典として重要されたものに、阿彌陀經を首めとし、般若心經、觀音經などがある。これらは讀誦用經典としてはまことに典型的なものである。ところで、これらの讀誦經典に對して、講經とでもいふか、講義をする經典も澤山ある。例せば華嚴經とか、法華經とか、解深密經とかがそれである。だが、實際、講經の方には社會性が乏しく、讀誦經典の方は昔から一般民衆に親しまれたやうである。事實經典のむづかしい研究とか、その巧妙な論理の工作といったやうなことは、或る方面に限られてしまつて、一般民衆との親しき交渉がたもたれなかつたやうにも思はれる。

大體、宗教は一般民衆の上にその基礎をもつべきであつて、或る特定の方面にかぎられるやうでは、宗教の本來の面目を見失ふものであるかも知れぬ。その點で、佛教の本來の性質も、講經から見出されないで、却つて讀誦經から求めらるべきであらう。とはいへ、講經にしても、讀誦經にしても、その内容に至つては同じ尊い價値をもつてゐることにはかほりがないが、讀誦することそのことが宗教の眞面目に契ふものであつて、讀誦の行持のうちには、佛の翼ふところのものを味はふことができ、體得することができるのであらうから、その形式に於て讀誦用に適する經典は、佛教護持の上に重要な役割をもつてゐるものとせねばならぬ。

讀誦するといふことは、いつでも、氣分をさはやかにするものであるばかりでなく、佛の心に融け合ふものである。讀經によつてほんとの宗教氣分を味ふことができるのである。

ある寺の住職であつて、一向學問もなく、社會的にも一向活動するでもなく、たゞ眞面目に法務をつとめるだけのものであつた。それがまた、不思議に村人達を力強く感化してゐた。その原由はほかでもなかつたので、ただ、ひたすらに無我に、讀經三昧にしたつてゐたことであつた。朝となく、晝となく、夜となく、隙さへあれば本堂で讀經したことが、村中へ力強い感化を與へたのであつた。

昔の高僧知識の、あのすがすがしい讀經の聲が奥深い典雅な香のたかい古びた殿堂から、さはやかに人びとの耳にかよつたとき、すべての人の心のうちから、高雅な氣分を喚びさまさずにはおかなかつたと聞いてゐる。

晩秋の夕暮、淋しさにみだされた心のうちへ、あちこちで、無我にいとなんである勤行讀經の聲をきかされたときには、悲しいやら、嬉しいやら、ほんとに自分自身を反省させられることがある。

經典の讀誦は、讀誦してゐるものも、その聲を靜に聞きほれてゐるものも、ともに、佛の慈悲の中に融けこま  
さずにはおかぬものである。

## 七、一部組織

今讀の組織は三段にわかれてゐる。即ち第一段は前行分、第二段は轉經分、第三段は後行分である。  
前行分は正し行法の序曲であつて、この中また五段に分れてゐる。だが、要するに次の轉經分の前提となるべ

きものである。その五段とは、

一、請護法衆——最初の「奉請四天王」乃至「直取涅槃城」の八句の偈頌である。

この八句はかの玄義分の歸三寶偈の文と同じ筆格であつて、直ちに行法を示したのではない。次の序曰以下  
の文もまた法事讚の發端を述べられたもので行儀を説いたものではない。

四天王については『大智度論』五十四・『翻譯名義集』十・『俱舍論』十一・『法華文句』二之二・『玄應音義』  
十九等を参照すればよい。また、四天等の護持の相については、高祖『化卷』末に、大集月藏分第九、諸天王護  
持品の文を引用されてゐる。奉請獅子王については、先哲の間に異論にわたつてゐるが、佛徳を喻況したもので

あらう。

行法の最初の準備として護法衆を奉請したことは、ひとへに、道場の嚴肅を保つためであつた。

二、法事大綱——序曰以下の文である。即ち行法の趣旨を述べられた一段であつて、常途の「表白」に相當す  
るものである。常途の「表白」はその修行される法會の趣旨を、本尊並びに大衆に對して啓白することであるが、  
今讀のそれはこの常途の表白とは少しくその趣を異にしてゐて、行法の當初、一般大衆に豫めこの法會の趣旨を  
徹底させようがために特に設けられたものである。その間、所化の流轉を痛論し、これに對する能化の悲濟をひ  
たすら感佩せられてゐる。

竊ヒソカニに以オモヒれば娑婆廣大にして火宅無邊なり。六道周居重昏永夜なり。生盲無目にして慧照未だ期せず。

引導無方なり。俱に死地に摧く。循環來去して逝水長流に等し。託命投神して誰か能く救はん。斯れ乃ち  
識合無際にして窮塵の劫、更に踰えたり。爾れより悠々として勝縁に遇はんこと何れの日ぞ。上、海徳初  
際如來より、乃至、今時の釋迦諸佛、皆弘誓に乗じて悲智雙行し、含情を捨てずして三輪普く化したまふ。  
然に、我れ無明障重にして佛出に逢はず。設使、同生すれども還りて覆器の如し。神光等く照して四生を  
簡ばず。慈及んで偏なく、皆法潤に資す。法水に沈むと雖も長劫に由ほ頑し。苦集相因して毒火時に臨ん  
で還つて發る。仰で惟れば大悲恩重くして等く身田に潤ひ、智慧冥に加して道芽增長す。慈悲方便視教宜

きに隨ひ、勸めて彌陀を念ぜしめ淨土に歸せしめたまふ。地は則ち衆珍雜間して光色競ひ輝き。徳水澄華して玲瓏として影徹る。寶樓重接して神光を輝かし。林樹瓔を垂れて風塵雅曲あり。華臺嚴整して種々希奇なり。聖衆同く居して明なること千日に踰えたり。身は即ち紫金の色相好儼然たり。進止往來空に乘じて無礙なり。若し依報を論ずれば則ち十方に超絶す。地上虚空等く皆異なし。他方の凡聖願に乘じて往來す。彼に到れば殊なし齊同に不退なり。但し以て如來の善巧總じて四生を勸めて此の娑婆を棄て、極樂に生ぜんことを忻はしめ。専ら名號を稱し兼て彌陀經を誦せしめたまふ。かの莊嚴を識り斯の苦事を厭ふて、三因五念畢命を期とし壽盡二臺に乗じて齊くかの國に臨ましめんと欲す。

まことに尊い教示である。日夜この勸誡を拜誦することを心がけたいものである。かくて、次に行法にかゝらぬ前方便として法事の規則を示して、

凡そ、自の爲めを欲し、他の爲めを欲し道場を立せば、先づ須く堂舎を嚴飾して尊像幡華を安置し竟りて、衆等の多少を問ふことなく、盡く洗浴して淨衣を著し道場に入つて法を聽かしむべし。若し召請せんと欲せん人、及び和讃の者は盡く立し、大衆は座せしめて一人をして先づ須く燒香散華すべし。周章一遍し竟りて然して後法に依て聲を作りて召請して云へ。

とて、先づ、法事を修する意趣を明して、自他を資益することが法事の目的であることを示し、次で、道場を

嚴飾して、身衣を潔淨にし、場内の軌則を明して、入場の作法を示したものである。

三、略請三寶——奉請三寶の一段である。先づ四十八行九十六句の偈頌をもつて略して三寶を召請するのであるが、ついでには先に厭欣を勸めてゐる。

般舟三昧樂願往生大衆同心に三界を厭へ無量樂乃至佛の願力に乗じて西方に往け。慈恩を念報して常に頂戴せよ。

般舟三昧樂とは『般舟讚』の序によれば、般舟とは梵語であつて常行道と翻すべきである。或は七日、或は九十日の間、身行無間の意味である。三昧もまた印度の語であつて定と翻じられてゐる。三業無間によつて心のまに佛の境界を現する。この時に身心すべて悅樂を感じるから樂といつたものであると釋してゐる。『般舟讚』の次文に

三界六道は苦にして停り難し。曠劫より已來常に汲々たり。到る處に唯生死の聲を聞く。乃至一び彌陀涅槃國に入りぬれば、即ち不退を得て無生を證す。

と示されてゐる。この釋から見ると、般舟三昧は因であつて、樂は果である。即ち定心念佛の果である。また、願往生、無量樂を一句一句の下に置いたのは念々に欣求を勸められたものと窺ふべきである。大衆等の一句は歴離であり、乘佛等の一句は欣求である。

若し大衆にして厭心を生じて火宅を出過せんと欲すれば、常に佛願に乗じて西方に往生すべきである。已に西方に往生することを得れば三界を離るゝことを得て、惡趣の體名俱に絶することができる。

次に、正しく彌陀、釋迦、諸佛の三佛の主件を請じてゐる。讚文には、

大衆華を持つて恭敬して立して、先づ彌陀を請じたてまつり道場に入りたまへ等

と、本佛彌陀を最初に奉請することを示されてゐるが、往生禮讚では、釋迦諸佛彌陀の順序に列ねてゐる。これは總より、別に入る次第であつて、今讚は別より總を出す次第である。即ち三寶歸敬の常規には教主たる釋迦を最初に出すべきであるが、今讚は正しく彌陀會の行法を明示したものであるから、彌陀をもつて法事の會主として、釋迦と諸佛とは會主たる彌陀の相伴に影向したものである。もとより三佛同じく不思議功德寶海所現である。三佛のみならずまた觀音等の徒衆までを統請してゐる。更にまた、別に二十五菩薩を奉請して、その護念を請ふた。

この場合の行道の人の威儀行狀を示されて、大衆華をもつて恭敬して立すと示されたものである。かくて、上來三佛の主件を請じ、二十五菩薩の來會を請ひ、彌陀會の法事を成就して、高座に於て彌陀經の説

教を請ふことが正に法事讚の正發起であり、これがまた今讚の別式として注意すべきである。

### 八、難思議、雙樹林下、難思の三往生

西山派、鎮西派、眞宗の間に異義がある。

鎮西派祖良忠は、三往生について二義を立てゝゐる。雙樹林下往生の第一義は釋尊の入滅の場所をあげて、穢土の無常を厭はしめたものであるとし、第二義は雙樹林をあげて常樂我淨の四徳をあらはしたものであるとした。また難思議と難思との二往生について第一義は難思議は極樂淨土の無量の快樂は思議しがたいとの意味であつて、難思とは、涅槃常住の理に住することを讚嘆したものとの意であるとした。その第二義は二往生の目は共に聲明のために句を作つたものであるとした。要するに、三往生の目は欣求淨土を勧めたものであつて、三往生を合して一類の淨土の證果のこととしたものである。

西山派の説も行觀などによると、良忠の三往生説と同巧異曲である。

眞宗では、三願、三經、三機、三往生と關聯して、非常に重要な問題として取扱はれてゐる。就中、三往生説は今讚を典據としたものである。

難思議往生とは、もとより機法因果ともに不思議であるところより名づけられた名稱であり、弘願門行者の往

生である。かの十八願の全體施名の尊號は機法一體、修性不二、法を全ふじて成ぜられた信、生即無生の不思議の果であり、實に妙法妙機妙因妙果である。この意味を難思議往生と名けたものである。

雙樹林下往生とは、要門行者の往生に名づけたものであつて、應化の釋迦佛が雙樹下に於て入滅したことに寄せて化土往生をあらはしたものである。所謂、邊地懈慢の往生であつて、十九願の所建であり、觀經の顯證するところである。

難思往生とは、眞門行人の往生であつて、難思議の議の一字を省いてその失を示したものである。法頌に約すれば難思であるが、その機修は思議に墮してゐるから、その得失は相なかなばすることになつてゐる。よつて往生の土は方便化土、疑城胎宮であり、二十願の所建であり、阿彌陀經の顯證である。

この三往生については、『三經往生文類』を指南とすればよからう。

以上の三往生の義は略請三寶中の重要な項目である。

四、廣請三寶——略請三寶は偈頌をもつて説示し、廣請三寶は長行をもつて重ねて請ふてゐる。これは佛典の常途の様式に則つて、重頌の形式である。

この長行の中に於て、廣く三寶を奉請するうちに、別して偈文をもつて觀世音を讚嘆してゐるが、これは正しく、彌陀右脇の侍士であり、極樂の上首の菩薩であるために、諸菩薩の代表として請讀せられたものだらう。また、廣略請のうちに、奉請の一段は、單に奉請といはれてゐるが、もとよりそのうちに、敬禮、讚嘆、供養の行法が附隨して明かされたものと見べきである。

五、前行道——上來奉請した三寶に對して行道する一段である。行道とは敬慕の意味を貌にあらはしたものであつて、行道行は即ち歸敬の至極だとされてゐる。七周行道などはことに慇懃なものであつて、而も、その間、讚文をもつて佛恩の廣大なることを歎じて、次の轉經を引きおこす前提をなしてゐるものである。

六、前懺悔——前段に於て佛恩の廣大なることを讚嘆し、願て、あさましき自己の長時流浪の苦を想ふにつけて、この懺悔の一段があらはれたのである。先づ六障を懺悔し、觀佛三昧經にあらはれたる地獄の苦相など、當然の報果として詳説されてゐる。この懺悔の一段を行法の中に於て特に明示せられたものは、次の欣求の境に對して、厭離のそれを對比せしめようとしたものであらう。

次は轉經分である。これは正しく一部の正宗分ともなるものであつて、この中に於て、阿彌陀經を十七段に分けて、段々ごとに讚文を添加して極樂の依正二報の莊嚴を讚美してゐる。そしてまた、阿彌陀經を主體としたことは、前述の通り、阿彌陀經は欣求の心を勧むる上に、まことに、適切な經典であるからである。

次に後行分では、今讚の結論をつけたものである。これについてまた五段に分別されてゐる。

一、後懺悔——別して身三口四意三の十惡をあげ、それ／＼について鄭重に懺悔してゐる。この一段は正しく、

厭離と欣求との對比から、次の發願願生を引きおこす意圖に外ならぬ。

二、後行道——行道は前にも述べたやうに、歸敬の至極を表現したものであるが、この後行道は最初に奉請した諸佛世尊が正に法事の終了と同時に各々本國へ還歸されるに際して、最後の歸敬を表示した一段である。その間に於て、重ねて往生願求心を表白してゐる。

三、嘆佛咒願——これは「願以此功德、平等施一切」といふ總回向の文に相當する一段であつて、上來所修の功德を、法會の施主、同行の諸人、並に一切の有情に回向することである。

四、唱禮——奉請の聖賢に七尊あるために、七禮敬を用ひてある。これは行道の時の七周に相應するものである。

五、隨意——法會の最後に當り、運心をもつて經を三處に送り、令法久住、利樂有情を希念する一段である。

その三處とは、一に摩尼寶殿、即ちこれ天上界の法藏である。二に龍宮大藏、これ即ち龍族護持のそれである。三に西方石窟、これ即ち人中の法藏である。

已上略して、今讚の内容組織について一言したが、今讚の形式は、全く天台の法華三昧の行法を典據としたものであつて、この上に更に、整頓した行法を組織したものである。後世淨土門内の法式行事はすべて今讚の行儀を典據としたものである。而もその内容たるや、全く厭欣心をすゝめたことにあつたのである。

聖典講讀全集第十三回配本・昭和十年十二月十日  
印刷・昭和十年十二月廿七日發行・編輯者宇野圓空・  
發行者東京市小石川區諏訪町五九番地小山久二郎  
印刷者東京市牛込區改代町二四番地田中末吉・  
發行所小山書店・版權所有宇野圓空及小山久二郎